

白石実三宛 綿貫六助書簡について

市川祥子

白石静子氏所蔵による白石実三宛 綿貫六助書簡は十四点が確認されている。「白石実三とその時代」(群馬県立土屋文明記念文学館第13回企画展、平14〈2002〉・4・27〜6・9)に何点かが展示されていた事からその存在を知り、綿貫の作家修業時代を推測するための資料として白石氏に閲覧を申し入れたところ、快く閲覧、翻刻をご許可いただいたので、ここに紹介しつつ、若干の解説を施したい。

また、論者は先に綿貫六助の著作リストを提出しているが、その後の調査と、今回の白石実三との交際の調査から、いくつかの作品を知る事が出来たので、合わせてその補遺を行いたい。

《白石実三宛 綿貫六助書簡》

凡例

- ・日付の早いものから順に紹介した。
- ・旧字体は新字体にあらためた。
- ・封筒、葉書の表書については、文字の行を適宜あらためた。
- ・原稿用紙については文字の行と列を、便箋と葉書については文字の行を維持した。
- ・(1)は一枚目であることを示す。

資料①

〔大正7年5月13日付、書簡四葉〔消印7・5・15〕〕

〈封筒〉

(栞)市外代々木初台五四〇

白石実三様 親展

(ウ)市外高田村雑司谷九二五

綿貫六助

五月十五日

〔消印7・5・15〕

〈書簡〉(原稿用紙)

(1) 『いま一年学校の方が有ったッけと思つて、社に勤めるのを止して、必死になつて創作をして見たら どんなものでしやう。あなたも外の同級の方とはちがつて年もかなりすぎてゐるし、また何時戦争等で引出されるかも知れず、生活費は兄に相談すれば何でもありませんから、……』

お人よしのぼんやりした女で、私はいつも妻には不足を感じてゐるのですが、昨夜から三十九度に腹痛の附録まで加はつて寝てゐる枕許で、薬瓶を取りあげながら、斯う云つた妻の言葉は、何で私に物を考へさせずにおきませう、私も半意識にはかうした事も考へないでもなかつたけれど、私に住み、私を頼み

私を思ひ 私に生きる女が、斯う具体的に云ふのを聞きますと、痛む私の臍内からも、ある不思議な力が、潜在の境地から首を擡げやうとしてそして熱い涙となつて枕につたうのでありました。

(2) 十一時過ぎた頃は、家内皆寝ました、私はそつと、枕許に電灯を引き寄せて、幾分緊張した気もちで、本月の早稲田文学をよみはじめました、はじめから逐次に読んで、いつぞや、お宅で承りました「嘉一君の墓」といふのに来たのです。

私は読み了つて、なつかしさを感じました。それから夜具のなかへ頭を衝込んで考へますと数日臥せつて居た私は、がらにもなく神経がとがつてゐるので、無暗に涙がながれるのです。

(3) 「名は別でも、矢つ張り自分だ、俺も戦に行つた、忠節と云ふ小さい名目の下に無邪気な ロスを幾百人となく殺したばかりか自分の部下も数十人殺してゐる。そして俺は弾丸に肉体の所々を焼かれて生きて帰つた、けれどあの一発でも脳なり心臓なりに当つたらどうであつたか、そして俺は恋した支那の少女の居る満州の土になつたのだそれは可いけれど、人気の善くない自分の村・・・これは云いたくない思ひたくなけれど、俺が少くも嘉一君と同位置におかれる事は必然だ、基より丈六の石の代りに葺一本で沢山だ、けれどおれは仏者であ

ると同時に、嘉一君である、その時に俺の為に、その死を美化してくれたり、その石牌を心配してくれたりするのだ、美化される人、美化する人、何とまあ、奇麗なことだろう・・・

斯う考へてゐますと、私の胸は深い夜の呼吸を通して、宇宙のどこまでも拡がつてゆきそしてその美しいものに対する、感恩の涙が流れて来ます。

また最後の括弧がありましたので、実際の出发点もよくわかり、殊に私はありがたくおもひました次才です。

私は枕を胸の下に宛て、なやましいなか、ら、かうした事を書きました、粗忽な所はおゆるしく下さい。

(4) 先刻、妻の申しました事に対する、私の事に就きましても、他日参上して、御教示を頂きたいとおもふてゐます。

今の病氣等は一寸の風で何でもありません。

× ×

戸川君も 学校に来てゐます そして論文もおおだしになつたそうです。若し、田山先生のお宅でおめにかゝらなかつたら、私も思ひながら 戸川君に苦言を呈せず 戸川君も登校せずに、家庭や何かの煩因に囚はれて居たかも知れません、だつて私より近しいお友だちが沢山ありながら、私があなのお宅のおはなしをしてから登校するやうになつたのですもの、そうおもはれます。

× ×
 近いうちに参上しますから、何卒近日御
 かきになった、著書の拝借ができれば幸甚
 であります。

五月 十三日 夜 六 助
 白石 実 三 様

侍史

資料②

〔大正7年〕6月3日付、葉書〔消印□・6・4〕

〔栞〕府下豊多摩郡代々木初台五四〇

白石実三様 6.3

高田村雑司谷九二五

綿貫六助

〔消印□・6・4〕

〔ウ〕昨日北先生不在故本日御目二掛り

書面を以て八田先生の御宅へ参り

ました、北先生から才三中学と承りました

それで校長先生ハ明日教頭と相談

の上返事するとの事 不取敢御礼

申上升、白石さんからも御話をきい

たと云ふてゐました、

資料③

〔大正7年6月4日付、書簡二葉〔消印7・6・5〕

〔封筒〕

〔栞〕豊多摩郡代々木初台五四〇

白石実三様 親展

〔消印7・6・5〕

〔ウ〕府下高田村雑司ヶ谷九二五

綿貫六助

六月四日

〔消印□・6・5〕

〔書簡〕(原稿用紙)

(1) 拝啓

本日八田先生から呼ばれて、御採用

になると云ふ内命を 受けました。

これハ 先生の 御話をして 被下つた

のが 動機で あるやうに 北先生から

も 承りました、何れ その内 御礼に

参上する積りですが、不取敢 報告申上升、

私は創作から離れるやうにも思ひますが

またより近く創作に接近するやうにも感

じます。それハ勿論私の生活そのものが

高上 緊張される意味に於て、 否や接近ど

ころかこの高上された生活から私の芸術が

生れなければならぬ、と思ひました。そして

八田さんに面接した数時間に於て私が躰

験した、その美麗な世界、その玲瓏な主

国に生れる私は、神に感謝せねばならぬと

思ひました時、涙がにじみました。

私も職務に勉めて その餘暇には書く決心

ですから、それにつきましてもお力をおそへ

ください。そのうちまた お伺したいとお

(2)

もつてゐますが、御礼申上ます。

六月四日 綿貫 六助

白石実三様

机下

御家内様に 宜しくねがひ
ます

資料④

〔大正9年8月15日付、葉書〔消印9・8・16〕〕

(托)代々木初台

白石実三様

滝野川谷津一、二〇七

綿貫六助

十五日

〔消印9・8・16〕

(ウ)暑中御見舞申上ます

けふ巢鴨の同県の足袋屋に
寄りましたら

「上州の小説家は今誰だんべえ？」と
訊かれて、

「白石さん一人だ」と応えた機ッ掛で、
おもひつき、このお伺を申上ました。

御自愛希上ます。

資料⑤

〔大正10年9月29日付、書簡三葉〔消印10・9・30〕〕

〈封筒〉

(托)市外豊多摩郡代々木初台

白石実三様 親展

〔消印10・9・30〕

(ウ)市外高田町雜司ヶ谷五八〇

綿貫六助

九月廿九日

〈書簡〉(原稿用紙)

(1) 『ムツシユウ!』 あの中学世界へまつと

書いてください!』

外交官の子がすがりつくやうに甘へかゝる
と、わきの方から、

『先生! あれツきり書けないんですか?』

まつと書いてくださいな! なんぼでも買ひ
ます。 この次には? 先生!』

銀行の頭取の児がすまして云ふと、まつ正
面の方から 真面目一天振りの神学生が、

『私は此度の告白を一当面白く読みました、
文芸も将来は深刻な 信仰的なものになるで
はないでせうか?』

鉄縁の眼鏡から、人の顔を凝つとすかして
見てゐる。

(2) 『それはさうだが、芸術品の要素として信迎
のないのは永久性はないね、けれどまつ香
の臭や十字架くさいのでは 芸術境に活歩
するわけにはゆかないね、そこを通りそこから
抜け出して澄んだ眼で凝つと観照しなければ
いけないね。』

(3)

すると平素 童話こわいなどを書いてゐる、卸店の子が、

『先生！すると信仰の作家 は誰なんです？』
『さうだねえ、大蔵経の 花袋さん、聖書の藤村さん等は 好適例かも知れないね。』

この人たちがあと十年以上も あの努力をつゞければ 慥かに世界へ出ても押しも押されもされないだらうね。』

すると、茶目と弥次とを捏ね交ぜたやうな金持ちの子が、

『それぢや先生はどうなんです？』

『僕はまだ 玉子だ、これからうまくかへるかどうかね。自分ではまじめにやるが……』

女評論家の子が、『中学世界にはあと何をかくんです？』

『人を斬つた夢』を載せるだらう

『そいつあおもしろい！』

大勢でわい／＼と囃し立て、ゐると、

始授業の ベルがなり出した。

白石先生！

私はこんな話を生徒といつもしてゐます。それで 生徒に感心させたい、と云ふことが 私の重荷になり 私を 鞭打つて来ます。

私は、先生の 御蔭で無邪気 な生徒から 崇拜のやうなものを受け、それが立体的に 私を上げますのであります。

私は この幸福を感謝せずにはゐられませ

ん。

それで私は 前にお願した 他の雑誌の方はやめて、やはり 中学世界へ「人を斬つた夢」を載せて頂き たいと思ひました。何分 よろしく おねがひいたします。

九月廿九日

綿貫 六助

白石 先生

御 机下

資料⑥

【大正10年10月21日付、書簡一葉】

〈封筒〉(名刺)陸軍歩兵少尉 浦野芳雄を同封

(托)東京府下代々木初台

白石実三様 侍史

浦野君に託します。

(ウ)市外高田町雑司ヶ谷五八〇

綿貫六助

十月廿一日

(1) 〈書簡〉(原稿用紙)

拝啓

兼て ある誌上 で 御知りあひの

また この間も 申上ておきました

浦野 君を 御紹介 申上ます。

どうぞ 先生の御指導をねがひます。

私が参上しなければならぬのですが折悪しく妻が病気で学校の方も休んでゐます 始末ですから悪からず御願申上ます。当人は田園農事のかたはら真面目に努力する決心なのですから何卒御あい被下い。 敬具

大正十年 十月廿一日 綿貫 六助
白石実三様 侍史

資料⑦

〔大正11年1月1日付、葉書〔消印10・12・31〕

(枉) 東京府豊多摩郡代々木初台
白石実三様

市外高田町雑司ヶ谷五九一
綿貫六助
〔消印10・12・31〕

(ウ) 謹賀新年

深厚な御同情被下ありがたく御礼申上ます
御一家の御健康を祈ります。
正月元旦

資料⑧

〔大正11年1月26日付、葉書〔消印□・□・26〕

(枉) 市外豊多摩郡代々木初台
白石実三様

市外雑司ヶ谷五九一
綿貫六助
一月廿六日
〔消印□・□・26〕

(ウ) 寒中御見まひ申上ます。

「ある日の中学教師」是非御採用ください。そのうちお伺申上ます。
みなさまによろしく。

資料⑨

〔大正12年6月28日付、書簡三葉〔消印12・6・28〕

〈封筒〉

(枉) 淀橋区代々木初台五三四
白石実三様 御直披
〔消印12・6・28〕

(ウ) 東京世田谷区世田谷五丁目二九九八
綿貫六助
六月廿八日

〈書簡〉(便箋)

(1) 拝啓幾度も推参御馳走に預り恐縮に存じ升。好都合な事にはお宅 日蓮さまですから何卒

精々御信仰、御瞻迎、御依頼の程希上升。
私も不徳未熟ですが御快方を祈願申して
おります。

靈感に依り某行者（かなりあらたかなる）
からお薬をおろして下されましたから、
左にお知らせ申上ます。

薬湯にたて、毎日入浴するのです。

約一週間で別な新しいのと交換します。

1 もち草

2 おんばくし（干したものの）

3 大根の葉（干したものの）

4 みかんの皮（干したものの）

花菖蒲（根と葉の干したものの）

5 桑の樹皮（干したものの）

6 人参の葉（干したものの）

7 塩（約拾錢）

分量は何共知らせませぬから目分量で若干宛
取合せ右七種を湯に立て、入るのです。そして
一週間使ひましたら、そのカラは大樹の下に埋
める（又は川に流しても可）のです。そまつに
ならぬやう希上げます。

その浴中お題目 南無妙法蓮華經 をお唱へ下さい。

私もそのうちに参上 今度は三勝半七

酒屋でも語りませう。

朝夕御恢復を祈つております

皆々様に宜敷

六月廿八日

六助

白石実三様

御奥様

某行者も御全快を祈つてゐます

御安神希上ます

資料⑩

【大正13年（5月）22日付、往復葉書】消印13・□・22】

〈返信〉

（栞）市外代々木初台五三四

白石実三様

綿貫六助出版記念会

【消印13・□・22】

（ウ） この度綿貫六助氏の長篇小説『戦争』が出版されましたのを機
会に出版記念祝賀を兼ねて晩餐会を左記の所に於て催すことに致
しました。就ては何卒万障お繰合せの上御出席を願ひたいと存じ
ます。

（追而前日までに出席否やを御一報願たく存じます）

時 日 大正十三年五月二十六日夕五時

場 所 牛込神楽坂 プランタン

会 費 金貳円五拾錢（当日持参）

発 起 人 （順序不同）

島崎藤村 小島徳弥 徳田秋声 秋田雨雀

十一谷義三郎 近藤栄一 加藤武雄 戸川貞雄

加宮貴一 水守亀之助 足立欽一 本間久雄

幹事 本間久雄 林政雄 岡田三郎

湯浅真生 浜田広介 高梨直郎

〈返信〉

（栞）市内四谷局四谷新宿一ノ五一

聚芳閣方

「戦争」出版記念会幹事 行

東京市小石川区雑司ヶ谷町一三〇雲台館
綿貫六助

資料⑪

〔大正14年5月10日付、葉書〔消印14・5・10〕〕

(栴)市外代々木初台五三四
白石実三様 侍史

〔消印14・5・10〕

(ウ)御壮健のほど何よりうれしく存上げます。

わたくし今度書斎を左記に移しております。
どうぞよろしく御願ひ申上げます。

大正十四年五月十日

東京市小石川区雑司ヶ谷町一三〇
雲台館内

綿貫六助

御無さた仕りました。

おん奥様に何卒よろしくお願申上
ます。

資料⑫

〔大正15年1月1日付、葉書〔消印15・1・1〕〕

(栴)代々木初台五三四
白石実三様 玉案下

〔消印15・1・1〕

(ウ)謹賀新年

大正十五年一月元旦

御一家皆様の

御健康を祝します。

資料⑬

〔大正15年5月23日付、葉書〔消印15・5・24〕〕

(栴)市外代々木初台五三四
白石実三様 玉案下

市外練馬局羽沢三五一〇

綿貫生

五月廿三日

〔消印15・5・24〕

(ウ)拝啓先日は失礼申上ました。

『哀しき父』中学世界にお採り

被下るやうお願申上ます。さうして

御誌に滋味と情操との幾分をそへ

る事ができれば、この上なき私の幸

福です。何卒。御依頼申上ます。

資料⑭

〔大正15年12月1日付、葉書〔消印15・12・1〕〕

(栴)代々木初台五三四
白石実三様

〔消印15・12・1〕

(ウ)今度左記のところに移りました、何分不相変

御指導の程願ひ申上げます。

大正十五年十二月一日

市外長崎町三九八二

《解説》

綿貫六助

資料①は、白石静子氏所蔵による綿貫六助資料の内でも最も日付が早く、綿貫が白石実三に送った最初の手紙である可能性が高い。妻が、あと一年学校に通うつもりで創作に打ち込むよう勧めた事、白石の「嘉一君の墓」(大7・5)を読み、同じ日露戦争に出征した者として深く同情し感動した事、創作に専心する件について相談したい事、先日田山花袋邸で受けた激励への感謝等を述べている。

資料②は、前日、綿貫が白石の紹介状を持って八田先生、北先生という人物に会い、中学校への就職を依頼し、好感触を得た事を報告している。

資料③は、一昨日にひき続いて八田氏と会い、府立三中への採用内定を知らされた事を報告し、白石の紹介への感謝、職務に勉め創作に励む決意を述べている。

資料④は、巢鴨にある上州出身の足袋屋で白石の評判をした事を伝え、ご機嫌伺いの便りである。讀え方が露骨であり、追従ともいえる内容。庇護してくれる者へのこうしたあからさまで無邪気な好意の示し方は、綿貫に特有のものである。

資料⑤は、現在教えている中学生の好評を伝えながら、「中学世界」に作品が掲載された事への感謝と、小説における信仰の側面を重視し、花袋と藤村を高く評価する事を述べ、「人を斬つた夢」という作品の掲載を依頼している。作品が世に出た興奮と喜びとが文面から伝わる。後述するように「中学世界」には綿貫の作品三作が掲載されているが、「人を斬つた夢」の掲載は見られない。

資料⑥は、既に、宇田川昭子によって紹介、翻刻されている資料である。高崎出身の俳人、浦野芳雄の紹介状であり、綿貫が浦野に託し、白石の下に持参された。「陸軍歩兵少尉 浦野芳雄」の名詞が共に保存

されている。この時期、上州出身の文学を志す者にとって、白石の存在が大ききものであった事がわかる。

資料⑦は、大正一一年の年賀状である。前年、白石によって「中学世界」に作品が掲載された事への感謝がうかがえる。

資料⑧は、「ある日の中学教師」という作品の掲載を依頼した葉書である。消印が不鮮明で読み取れないが、先の三作を受けてさらに掲載を依頼したものと考えられ、また「雑司ヶ谷五九一」の住所が資料⑦と等しい事から大正一一年と推測できる。綿貫の作品の「中学世界」への掲載は三作の他になく、この依頼は叶わなかった。

資料⑨は、白石への病氣見舞いの便りである。行者から授かったという薬の処方伝え、髻題目を記してそれを唱える事を勧め、全快を祈っている。大正一〇年四月に綿貫一家は洗礼を受けているが、ここでは法華経を奉じる行者を信奉している。

資料⑩は、書き下ろしで刊行された『戦争』の出版記念会の案内状である。消印は月の部分の不鮮明であるが、『戦争』の刊行が五月二〇日、記念会が五月二六日である事から、五月と考えられる。場所は神楽坂のプランタン。発起人、幹事には錚々たる面々が名を連ねており、『戦争』の評価の高さ、作家への期待の大きさがうかがえる。この作によって綿貫は文壇での地位を確立した。返信用葉書がそのまま残っている。白石は出席しなかったものだろうか。

資料⑪は、大正一四年五月、「雑司ヶ谷町一三〇」への転居通知である。

資料⑫は、大正一五年の年賀状である。

資料⑬は、「哀しき父」という作品の「中学世界」への掲載を依頼した葉書である。まとめて掲載のあった大正一〇年からは時間が隔たっている。白石の名は、「中学世界」の発行兼編輯者として昭和二年三月号まで記されているが、この作の掲載も見られない。粗末な小屋に病気で一人臥せっている父を、戦争から戻って軍人として立身した息子が訪ねるという内容は、大正一五年五月の「兄の略血」の一部分に

描かれている。時期が近い事から「哀しき父」はこれと同様の題材を扱った作品を指すものと考えられる。

資料⑭は、大正一五年一二月、〔長崎町三九八二〕への転居通知である。

資料①から、綿貫と白石が最初に出会ったのは大正七年四月から五月初旬、田山花袋邸においてであり、綿貫が作家を志すにあたって、同じ上州出身、早稲田大学文学科卒、軍隊経験のある白石を大いに頼りにした事がわかる。名前の挙がっている戸川貞雄は、この翌々年には「中学世界」に「殺された犬」を、「早稲田文学」に「ある老婆」を発表しており、綿貫は彼の活動を通して作家への夢を強く刺激されたものと推測できる。

資料②、③から、綿貫は、白石の紹介によって府立三中へ就職した事が確認できる。宇田川昭子編「白石実三年譜」¹⁰⁾によれば、白石は大正七年五月に府立三中に就職、七月には退職している。前年一二月に「大阪朝日新聞」の懸賞小説で選外佳作となった出世作「返らぬ過去」が七月に刊行されるといふ時期である。綿貫は白石の退職と入れ替わりに府立三中に就職した。ちなみに、「白石実三とその時代」に展示された団扇への「返らぬ過去」の会記念寄せ書き¹¹⁾には、正宗白鳥、中村屋湖、岡本一平、窪田空穂等に混じり、六助・貞生と並んで署名がある。綿貫の白石への傾倒の程がうかがえる。既に三十代後半で妻子と母を抱えた綿貫には、安定した収入を得つつ作家修業をする必要がある、資料③からは希望の職を得た感激が伝わってくる。資料④からもこの時期の両者の交流の深さを知る事が出来る。

資料⑤から、綿貫の作品は白石によって「中学世界」に掲載された事がわかる。「中学世界」に掲載された綿貫の作品は、「罷免された老教師より」¹²⁾ (大10・5)、「老教師の悔悟」¹³⁾ (大10・7)、「老体操教師の告白」¹⁴⁾ (大10・10)である。九月二十九日付のこの資料の時点で前二者は掲載済で学生に読まれており、「老体操教師の告白」も、少なくとも

も綿貫はその掲載を知り、学生の言葉の中に〔此度の告白〕とある事から考えて、発行日より早く店頭に並び学生に読まれていた可能性が高い。

「罷免された老教師より」は末尾に〔二・三・一〕の日付を付し、「僕」がK君という、昨秋まで勤めていた学校の学生に語りかける体裁を取っている。「私」はその学校で体操と英語とを教えていたが、昨秋罷免された。問題視されていたKに偏見、憎悪をもって接した事を詫び、Kの人格、芸術的資質を認め、送られた油絵に慰められ励まされている事への礼を述べている。自身の弱さを告白して謝罪し、精神的に真の人間になる決意を述べて終わっている。

「老教師の悔悟」は末尾に〔二・四・三・夜〕の日付を付し、H君という、昨秋まで勤めていた学校の同僚に向けて語る体裁を取っている。近頃洗礼を受けた時の感慨と、新しい中学に勤め、キリスト教の下で生まれ変わって清浄な生活を続ける決意を述べている。同様の体裁であるが、前作のように、学生との心的な交流を描いた面は見られず、自身の近況、心情の報告に終始している。

「老体操教師の告白」は末尾に〔二・七・二〕の日付を付し、罷免を知って、昨秋まで勤めていた学校の学生から送られた手紙を引用しつつ、罷免の原因となった出来事に言及する。手紙の、「僕」を擁護する内容に感謝し、罷免の直接の原因となった、クラス全体でのカンニング事件に対する感想を述べ、それ以前の、泥酔して喧嘩相手に軍刀で斬りつけ重傷を負わせたと報道された(しかし実際には事前に軍刀を取り上げられていて手を下していなかった)事件、労働者との喧嘩騒動といった悪行を振り返り、現在ではキリスト教による学校の教師として清浄な日々を過ごす近況を伝えている。

「罷免された老教師より」は、白石が為藤五郎から引き継いで「中学世界」の編集に携わるようになった最初の号への掲載である。自分の編集が可能になつてすぐに綿貫の作品を載せている事から、期待の大きさがうかがえる。これまでの資料から知られるように綿貫は白石を

慕い、親交は深かった。しかし、それだけが掲載の理由ではない。白石は同号に「輝かしき希望へ―新編輯者として」という文章を載せている。そこでは、自身が中学の教師を経験し、当時から心は常に学生と共にあった事を言っており、「反対に、常に諸君から何事かを教はらうとしてゐました。すくなくとも真純な清い無邪気な諸君の気分によつて、自分の心の汚濁を洗ひ去らうとしたことだけは確かです」としている。学生の真摯な態度と真心とによつて自分の罪がそがれ、新たに生まれ変わったという内容を持つ「罷免された老教師より」は、ここに掲げられた白石の学生に対する姿勢と合致している。また、同時に掲載され、新しい編集方針を示した「懸賞記事募集」の告知には、「(学生小説 題材自由但し四百字詰にて約二十枚以内)の募集として、(仮にも学生青年の生活に触れた傑作ならば喜んで頂戴致します。所謂大家流作家の書きなぐりものより諸君自身又は無名青年作家の力作の方がどくらくる諸君に共鳴するかわからないのです)とある。七千字強のこの綿貫の作品は、白石が求める、学生青年の生活に触れた無名作家の力作であるところの(学生小説)に、内容、分量とも合致する。(学生小説)と冠されておらず、また綿貫の体験に直接取材し、彼の感動しやすい資質があつてこそその作品だが、執筆の時点で既に発表誌の編集方針が前提となつていたと考えるのが妥当であろう。三作の内、学生に語りかける調子を持たない「老教師の悔悟」が、他の二作より目次での活字が小さく、掲載の位置も悪いのはそのためかもしれない。

この書簡の最後にある「人を斬つた夢」は、「老体操教師の告白」の一部分に既にそれと同じと思われる題材が扱われている。この題材を中心に別に書かれた作品を指すものと考えられる。

この資料⑤の興奮、感激した調子からすれば、この時点では、綿貫は「中学世界」への掲載をもつて十分な達成と捉えているようである。翌々年に出された綿貫最初の単行本「霊肉を凝視めて」¹⁵⁾(大12・2)の後記には、「(大正十一年の早稲田文学十二月号に発表した家庭の憂鬱が、非常にいゝと思ふから、他の力作があつたら合せて、新人叢書に

入れたいと云ふ突然の書面が、自然社の主人梅津氏から来た)、(本年の早稲田文学三月号に発表の筈であつた、戦場小話に、最近の創作にかゝる未発表の数篇を加へて、出すことにした)とある。また「霊肉を凝視めて」所収の作品にはそれぞれ末尾に日付が記されている。「小林」(一九二二、一一二)、「強い人」(一九二二、一一一)、「白日の憂鬱」(一九二二、八)、「松子の死」(一九二二、八)。「戦争小話」は五話からなるが、「一獣人」(一九二二、七)、「二捜索隊」(一九二二、一〇)、「三暗雲」(一九二二、一〇)、「四二人の兵卒」(一九二二、一〇)、「五朝陽」(一九二二、二、秋)。これらの日付によつて、おおよそ「中学世界」に作品が掲載されたあたりから、文芸雑誌への進出を夢見て作品を書き溜めていったものと推測出来る。「家庭の憂鬱」以降、「早稲田文学」に「文章倶楽部」「新潮」といった雑誌に顔を出すようになった。この後記ではまた(島崎、本間両先生)に感謝を捧げているが、藤村の大正一四年五月一七日島中雄作宛書簡¹⁷⁾では、綿貫の「上京」と題した原稿の「中央公論」への掲載に、消極的ながら口添えをしている。

資料⑧、⑨では作品の「中学世界」への掲載を依頼している。大正一一年以降「中学世界」への掲載はないものの、同じ博文館の「少年世界」には「冒険実話 熊狩り」¹⁸⁾(大12・3)、「満州王鬼將軍 張作霖の少年時代」¹⁹⁾(大15・3)が、講談社の「少年倶楽部」には「立志美談 聖イシドール」²⁰⁾(大12・4)、「成功美談 ペンフランクリンの苦学」²¹⁾(大13・5)がある。「熊狩り」は、幼い日に今は亡き兄と熊狩りに出かけた思い出を綴り、日露戦争の体験を経た現在の自分を振り返つたまとまつた作品だが、他はいずれも書き飛ばした感が強く、金銭のための執筆と考えるべきであろう。

ところで、綿貫はアンケート「私の初めて得た原稿料」²²⁾(大14・1)に、「短篇集「霊肉を凝視めて」を出した前の年だつたと思ひます。童話『可愛い露西亞兵』といふのを秋田さんにほめられて、白鳩にのせてもらつて一枚一円宛十円程頂戴」と答えていた。「霊肉を凝視めて」

の刊行は大正一二年二月。「可愛い露西亜兵」の「白鳩」への掲載は未確認であるが、この文章から大正一一年の事とすると、大正一〇年の「中学世界」への作品の掲載はそれより早い。原稿料も貰っていたはずだが、このアンケートでは「中学世界」の作品について全く触れていない。綿貫の自意識の強さは、他にも自作に関する文章を多く残させたが、それでも他の少年誌の作品も含めて全く言及されてない。これらが、綿貫を含めた当時の作家の考える文学、小説の範疇に入らなかったものと推測はできる。しかし、作家への志を励まし、作品を掲載してくれた白石については一言あってしかるべきだと思われるのだが、そこは彼特有の無邪気さからか、掲載の依頼を断られた恨みからか、無視した形になっている。

同時に、綿貫が少年誌の作品を小説とは異なる姿勢で書いたという意味では、「中学世界」の三作には虚構の意識が薄く、彼の実際に即している可能性が高いと言える。これらと資料②、③などから推測できるのは以下の点である。綿貫は、大正四年九月一日に早稲田大学文学科英文学科に入学、七年七月五日に卒業し、その七月から府立第三中学校の英語兼体操の教師となった。学生に手を焼きつつ、「煤烟塩水で、庭の草木も枯れて育ち得ないやうな、君の学校に居た時には、随分僕も下等な悪者で、僕は靈的には既に枯死するまでに墮落したものだ」

〔「老教師の悔悟」というような生活を（二年有余）（「老体操教師の告白」）送ったが、大正九年秋（職務に対する熱誠な私の眼の下でクラス全体のカンニング）（「カ」）という事件によって待機、辞職となり、翌一〇年五月その事情に取材し失職中に綴った「罷免された老教師より」が白石によって「中学世界」に掲載された。それより先、四月六日から別のキリスト教による中学校に職を得、四月一七日には家族全員が関口台町の公会堂で洗礼を受けた（「老教師の悔悟」）。

資料⑩は、大正一四年五月の雑司ヶ谷への転居通知である。綿貫一家は、大正一二年九月の関東大震災後まもなく、妻の実家のある会津高田に引きこもった。『戦争』の序には（会津国高田町乙四四一三寓居

にて）と記されており、大正一四年三月の「雪」など、その後しばらくは会津高田を舞台とした作品が続く。この転居通知はそこから東京へ戻った折のものと考えられる。資料⑫の大正一五年の年賀状も同じ住所から出されており、しばらくはそこに留まったようだが、資料⑬の依頼は練馬の羽沢から、資料⑭の大正一五年二月の転居通知は長崎から住所が移っている。

綿貫は白石に年賀状、転居通知を送って所在を知らせ続けている。ただし、残された資料から判断すれば、それは「中学世界」に白石が携わっている間である。勤ぐれば、「中学世界」の編集者でなくなった白石には用がないという事なのかも知れない。また、綿貫は、昭和三年には「変態資料」「変態黄表紙」などへさかんに自伝的男性小説を載せるようになる。これでは、白石の携わる青少年向け雑誌への作品の掲載が難しいだけでなく、交流自体が途絶えたとしても不思議はない。今回、白石美三宛 綿貫六助書簡によって、特に大正七年の大学卒業後「家庭の憂鬱」が発表されるまでの、綿貫の活動がおおむね明らかになった。拙稿注（1）で（綿貫は早稲田大学を）（卒業後、府立第三中学の英語兼体育教師をする間に作品が雑誌に掲載されるようになる）としたのを、ここに訂正したい。

最後に、閲覧、翻刻をご許可いただいた白石静子氏、閲覧に便宜をお図りいただき、ご助言をいただいた宇田川昭子氏に、心より感謝を申し上げます。

注

- (1) 拙稿「綿貫六助素描」〔群馬県立女子大学国文学研究〕22、平14（2002）・3・15
- (2) この間、群馬県立土屋文明記念文学館に寄贈された田嶋一郎氏の「綿貫六助研究資料」を閲覧した。記して感謝申し上げます。
- (3) 「嘉一君の墓」〔早稲田文学〕150、大7（1978）・5・1

- 5・12 「高平村雲谷寺遊記」 「上毛新聞」
 6・16 「脱線旅行記」 「上毛新聞」
 7・7 「脱線吟行（上）」 「上毛新聞」
 7・14 「脱線吟行（下）」 「上毛新聞」
 7・28 「雪から濃緑まで」 「上毛新聞」
 12・24 「晩秋の国境（上）」 「上毛新聞」
 12・25 「晩秋の国境（下）」 「上毛新聞」
 昭和5（1930）年
 1・12 「義人茂左衛門を繞る」 「上毛新聞」
 上毛奥利根の史蹟巡礼（上）
 1・19 「義人茂左衛門を繞る」 「上毛新聞」
 上毛奥利根の史蹟巡礼（中）
 1・26 「義人茂左衛門を繞る」 「上毛新聞」
 上毛奥利根の史蹟巡礼（下）
 3・2 「節分日記（上）」 「上毛新聞」
 3・9 「節分日記（下）」 「上毛新聞」
 3・30 「茂左衛門地藏尊春季祭典所見（上）」 「上毛新聞」
 4・1 「茂左衛門地藏尊春季祭典所見（下）」 「上毛新聞」
 4・27 「春の日なが」 「上毛新聞」
 11・2 「紅葉白露」 「上毛新聞」
 11・30 「月夜野劇場松本錦枝紅葉興行」 「上毛新聞」
 昭和6（1931）年
 1・18 「更生報告」 「上毛新聞」
 — 利根郡月夜野屋旅館から—（上）
 1・25 「更生報告」 「上毛新聞」
 — 利根郡月夜野屋旅館から—（下）
 11・30 「小野忠孝氏第一詩集 牧歌的風景
 に寄する郷土人の言葉」 「上毛新聞」
 昭和9（1934）年
 4・27 「上州の義人と俠客の身辺に就て」へラジオ番組の告知
 「上毛新聞」
 昭和12（1937）年

9・1 「美しい風景とこゝろ」へアンケート

「旅」 14巻9号

10・1 「百虎隊と猪苗代湖」

「旅」 14巻10号

昭和13（1938）年

8・1 「雨晴れ日月朗かなり」へ加藤朝鳥追悼号

「反響」 72号

「小野君を追って」渡良瀬日記

発表誌不明。いずれも『定本ちゅうこう詩集』（美術四季社、昭47（1972）

9・28）に再録されている。

※本調査は、平成14年度群馬県立女子大学特定研究費（渡邊正彦・市川祥子）によっている。調査には、本学大学院生の大越三矢さん、西村賀世子さんの協力を得た。